

鉄器時代、ベトナム出土有角状耳飾の形態分類と編年

深山 絵実梨

はじめに

本論で対象とする3つの突起を持つ耳飾（以下、有角状耳飾）は、鉄器時代のベトナム、タイ、カンボジア、マレーシア、フィリピン、台湾など南シナ海周辺の地域（以下、環南シナ海地域）で、主に甕棺墓や土坑墓への副葬品として出土する遺物である。

なかでも、有角状耳飾がベトナム中部鉄器時代サーフィン文化の遺跡において多数出土する状況は、サーフィン文化の遺物が環南シナ海地域へ拡散する現象として理解され、鉄器時代に環南シナ海地域各地で交易がおこなわれていたことを示す根拠とされてきた。つまり、有角状耳飾はサーフィン文化に特有の遺物であると解釈されてきたのである。

しかし有角状耳飾自体を対象とした研究はまだ少なく、有角状耳飾がサーフィン文化の遺物であるかどうか、そもそもサーフィン文化とは何であるか、といった根本的な議論がおこなわれないまま今日に至っている。本論ではこうした問題点を解決するため、鉄器時代のベトナムを対象として資料を集成し、出土遺物の形態分類をおこない、空間的・時間的分布を検討した。その結果、「サーフィン文化の耳飾」と一様に考えられてきた遺物が製作技術、分布において異なる様相を示すことを明らかにした。

本研究の概要

1-1. 対象地域：ベトナム（図1）

ベトナムの国土はインドシナ半島の東岸を占め、南北に長いという特徴がある。西はカンボジア・ラオスと、北は中国と国境を接しており、東と南は南シナ海に面している。チュオンソン山脈（アンナン山脈）が国の南北に伸び、北端には紅河デルタ、南端にはメコンデルタが広がる。平野部はデルタ地帯と海岸線沿いにひろがるのみで、幅は平均して約40-50kmと非常に狭い。

国土は北部、中部、南部と地域が分けられ、気候風土はかなり異なる。北部は中国桂林から続く奇岩地形と紅河デルタが広がり、文化的には中国の強い影響を受けている。ベトナムのほぼ中央、フエとダナンの間地点には標高476mのハイヴァン峠が立地し、近年トンネルが開通するまで陸路での行き来が非常に困難であった。中部の海岸部は、かつてオーストロネシア語族に属

するチャム族が居住していた地域であり、内陸部はチュオンソン山脈と中部高原地域から成り、同じくオーストロネシア語族であるエデ族、あるいはオーストロアジア語族に属するバーナー族など、多くの少数民族が居住する。中部と南部はダラット高原周辺の高原地帯によって隔てられている。南部はメコン川によって形成されたデルタ地帯で、気候は熱帯に属する。アンコール期以前から、カンボジアとの文化的つながりが深い。

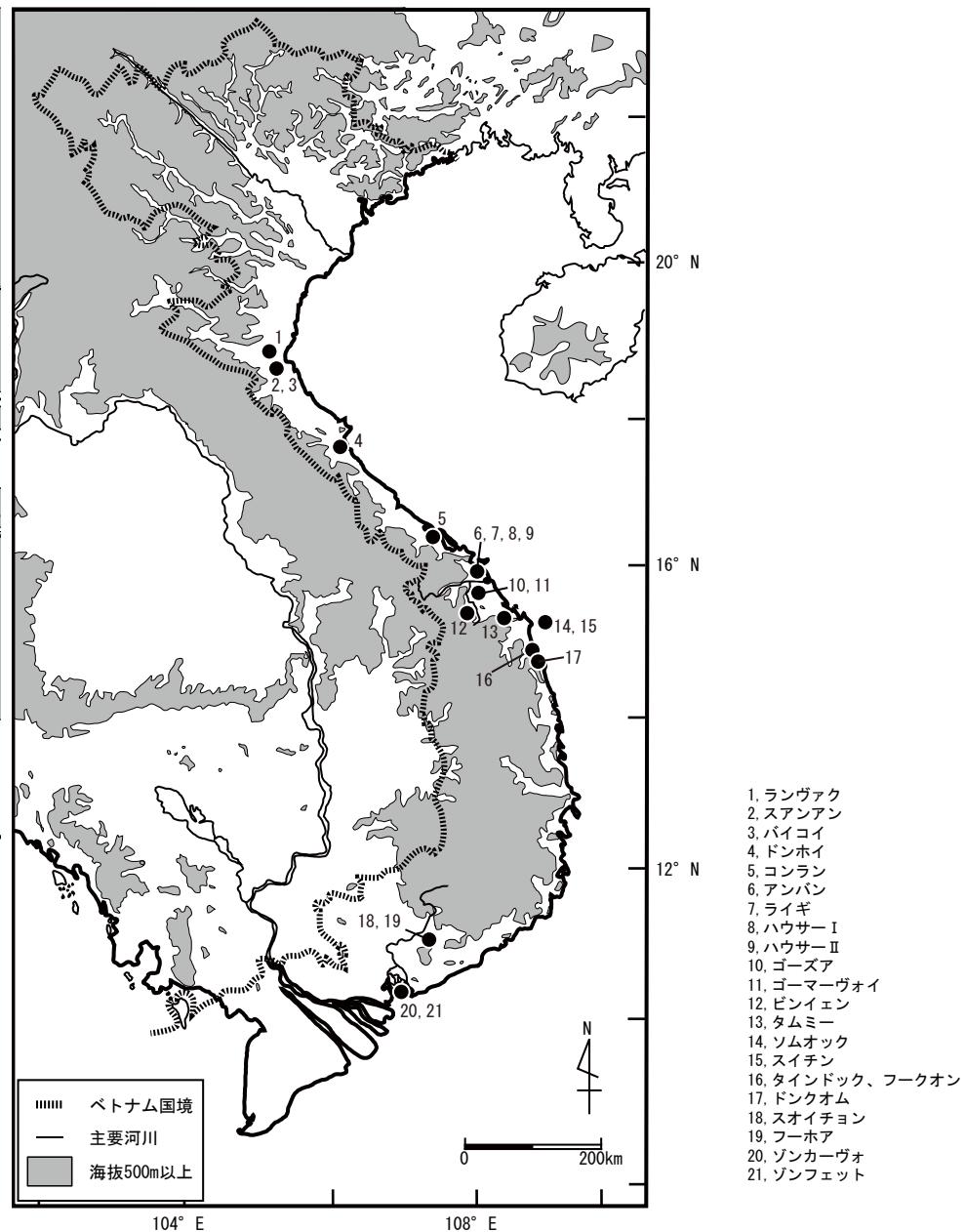


図1 本論で対象とした有角状耳飾出土遺跡分布

1-2. 対象遺物：有角状耳飾

本論では、「サーフィン文化の耳飾」とされてきた3つの突起を持つ有角状耳飾を、形態分類を通して再検討する。分類の際、耳飾の形状に関する用語として、耳朶を固定させる空間としての「穿孔」、穿孔に耳朶を通す際必要になる環の切れ目を「スリット」、耳飾の主体部かつ装飾部である「環部」、環部左右と下端に計3つ付く「突起」など、特定の部分を指す語を使用する。また形状

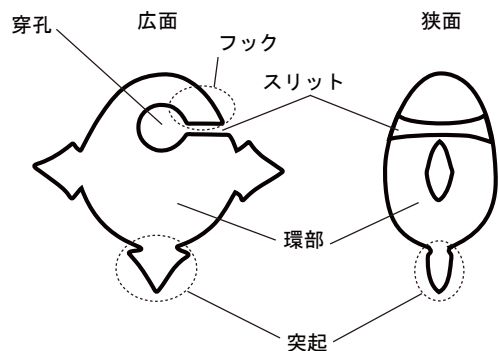


図2 有角状耳飾模式図と各部名称

に言及する際、左右と下端に突起が位置し、かつスリットが右側にあく位置を正位置（便宜上のもので装着状態を検討したものではない）とし、正位置においた際の表面及び裏面を広面とする（図2）。

筆者はこれまでの研究（深山2010a, 2010b）において、東南アジア各地から出土する様々な形状の耳飾を分類してきた。その結果、本論で対象とする有角状耳飾のはほぼすべてが3つの突起を持ち、偏心孔、水平スリットで環部断面楕円形（環部はヒル形と表現されることもある（横倉 1987b））であることを確認し、こうした形態的特徴を持つ遺物がFox氏（Fox1970）以来、「サーフィン文化の耳飾」や「サーフィンタイプ」と呼ばれている有角状耳飾であると定義付けた。従って本論で対象とする有角状耳飾は3つの突起を持ち、偏心孔、水平スリットで環部断面は楕円形であるという前提にたって論を進めていく。

有角状耳飾は、研究者間で「リンリンオー」（フィリピン、イフガオ族の語句）、「サーフィンタイプ」等の呼称が用いられることもあるが、本論の目的からいって、こうした呼称の使用には問題があると考え、本論文中では「有角状耳飾」と統一することにしたい。

2. 有角状耳飾研究の現状と問題点

東南アジアの有角状耳飾を初めて研究したのは、日本人研究者の鹿野忠雄氏であった。鹿野氏は有角状耳飾の突起を形態から5つに分類し、耳飾の起源と変遷や先史時代の文化の移動について考察をおこなった（鹿野1946）。しかし鹿野氏の分析と解釈は、現在までの発掘調査の成果から否定される点がいくつかある。たとえば、新出資料の分布から有角状耳飾の起源地と移動ルートの再検討が必要になったことや、遺跡や遺物の年代観が明らかになり、起源地に関する仮説が否定されたことがあげられる。また、鹿野氏は突起の形態からのみ分類をおこなっているが、筆者は耳飾の環部形状や厚み、穿孔の形状も分類項目として重視するべきであると考えている。鹿野氏の研究は環南シナ海地域の広域交流を想定した点において大きな意義をもつが、修正すべき点も多い。

耳飾の形態に言及した先行研究として、1960年代にフィリピンのパラワン島で発掘調査をおこなったアメリカ人考古学者 R.B Fox 氏の著書 (Fox1970) をあげることができる。Fox 氏は著書において、東南アジア鉄器時代の耳飾が3つのタイプに分けられることに言及した。そのうちの1つが本論で対象とした3つの突起を持つ有角状耳飾であり、FOX 氏は指標遺物が出土した地名にちなみ「サーフィンタイプ」と呼称している。特定の形態を指した呼称が古くから定着し、遺物が認識されているにもかかわらず、いまだに有角状耳飾に関する詳細な検討はおこなわれていない。

日本では、1986年の東南アジア考古学会大会において東南アジア各地の珧状耳飾に関するシンポジウムがおこなわれた。シンポジウムの『まとめと今後の問題点』として今村啓爾氏が各地域出土耳飾の概要をふまえた有角状耳飾の変遷を総括している (今村1987)。今村氏は、既存の形態から新しい形態が派生して耳飾の種類が増していき、ある段階に至って孔の位置が偏ったサーフィン文化に多くみられるタイプが発生したと指摘している。しかしこの画期がいつ頃なのか、耳飾以外の遺物からも同じような指摘ができるかについては明言されていない。

東南アジア考古学研究の初期から重要な遺物として認識され、注目されてきた有角状耳飾であるが、現在に至るまで基礎的資料整理や初歩的研究を欠いていることは非常に大きな問題点といえる。

3. ベトナム出土の有角状耳飾集成

以下、当該地域の地理、遺跡の立地、有角状耳飾の出土した遺構とその年代を含め、ベトナムで出土した耳飾の事例を集成した (表1)。

3-1. ベトナム中部、サーフィン文化期

ベトナム中部の南シナ海沿岸部には、鉄器時代にサーフィン文化と呼ばれる甕棺埋葬遺跡を主体とする鉄器文化が存在していた。遺跡は海岸部や、内陸部トゥーボン川沿いの砂丘上に分布しており、サーフィン文化の人々の海上・河川沿いの活動が指摘されている。居住遺跡はほとんど調査されていない。サーフィン文化の年代は紀元前500年-紀元後100年頃とされている。

サーフィン文化の埋葬は、長胴形もしくは卵形の甕に帽子形の蓋が組合わさる甕棺墓である (山形2006)。これらの甕棺は縦置きに埋葬される。1m近い大きさの甕も珍しくないが、人骨の検出は稀である。遺跡内の甕棺の分布から、これらの遺跡の存続期間は短期間であったと考えられているが、遺構の切り合い関係などは把握されておらず確かな論拠はない。

副葬遺物は縄文や彩色が施された土器、鉄器、貴石製・ガラス製・貝製の装身具が中心である。また、インド系の遺物 (カーネリアンビーズ) や漢系の遺物 (青銅鏡、銅銭) も出土しており、両地域と交流があったと考えられている。

以下、サーフィン文化圏内で有角状耳飾が出土した遺跡と遺物に関して、北に位置する遺跡から順を追って記述する。

コンラン遺跡 (Bui et al 2008) (表1 : 7-12)

トゥアティエンフエ省フエ近郊に位置する。現在までに見つかったサーフィン文化の遺跡の中で最北に位置しており、サーフィン文化の北端と考えられているが、当遺跡出土の甕棺はサーフィン文化の典型的な甕棺の形状とは異なっている。

2002年の第3次発掘では、14の発掘坑(総面積2300㎡)から216基の墓葬が発見された。うち212基が甕棺墓、4基が土坑墓であり、計1300点以上の遺物が出土していることから、大規模な埋葬遺跡であることがわかる。

遺跡の年代として $2490 \pm 70BP$ 、 $2630 \pm 60BP$ 、 $2770 \pm 65BP$ 、 $3310 \pm 55BP$ の4つのC14年代が得られているが、試料は不明である。報告者はこの年代を実際より古いとして、支持していない。

有角状耳飾は、3基の甕棺から計6点が出土している。これらの有角状耳飾はいずれも鏃のように先端の尖った突起を持つ。このうち5点は白色の石製で穿孔は円形、環部に稜を持つ(図4 : 8, 9, 10, 11, 12)。唯一、図4-11は片面のみに稜が認められる。1点は水色のガラス製(図4 : 17)でフック部分が欠けているが円形の穿孔であったと推測でき、環部に稜が認められる。

図4-9, 10, 11がM172号甕棺から、図4-12, 17がM194号甕棺から出土している。

アンバン遺跡 (Tran & Nguyen 2004, 青柳1991) (表1 : 13, 14)

クアンナム省ホイアン市近郊、トゥーボン川沿いの砂丘上に位置する遺跡群のうちの一つである。1995年の発掘で、26㎡から甕棺墓16基が検出された。遺跡の年代として $2260 \pm 90BP$ のC14年代測定値(未校正)が報告されている。

当遺跡からは2点、黄色から薄い緑色を呈する石製有角状耳飾が出土している。いずれも突起は鏃状を呈し、穿孔は楕円形で環部には稜がある。

ハウサーⅠ遺跡 (Nguyen & Ho 2004a, 青柳1991) (表1 : 19-21)

上述のクアンナム省ホイアン市近郊の遺跡群に属する。1993年と1994年に発掘がおこなわれ、1993年の第一発掘坑(6㎡)から甕棺墓3基、同年の第二発掘坑(7.5㎡)から甕棺墓3基相当の土器の集中が、1994年の第三発掘坑(9㎡)から甕棺墓6基が検出された。副葬品として前漢の五銖銭3点が出土していることから、遺跡の年代は紀元前2世紀から紀元前後頃とされる。

当遺跡では3点の石製有角状耳飾が出土している。突起はいずれも鏃状である。2点は薄い緑色を呈し、穿孔は円形で環部に稜はない(図4 : 5, 6)。濃緑色を呈する1点はフック部分が欠けており、穿孔の形状を特定することはできないが環部に稜はみられない。

ハウサーⅡ遺跡 (Nguyen & Ho 2004b, 青柳1991) (表1 : 22-24)

上述のクアンナム省ホイアン市近郊の遺跡群に属する。1993年の試掘では3つの発掘坑(11㎡)

から甕棺墓数基、1994年の発掘では2つの発掘坑（32㎡）から甕棺墓15基が検出された。副葬品として前漢の五銖銭6点と王莽銭が2点出土しており、BC185-90ADのC14年代測定値とおおよそ合致する年代を示している。

当遺跡では、鏃状の突起を持ち、穿孔は楕円形で環部に稜のある濃黄色を呈する石製有角状耳飾が2点、同じく鏃状の突起を持ち、穿孔は円形で環部に稜を持つガラス製有角状耳飾が1点出土している。ガラス製有角状耳飾の左右の突起は欠けている。

ビンイエン遺跡（Yamagata2006）（表1：32-38）

クアンナム省ノンソン県、トゥーボン川中流左岸の河岸段丘上に位置する。1998年の第一発掘坑（36㎡）では甕棺墓1基と考えられる遺物の集積部分が、第二発掘坑（35㎡）では甕棺墓8基が検出された。第二発掘坑のM7号甕棺からは前漢日光鏡（紀元前1世紀中頃のものとする）が出土しており、第二発掘坑はサーフィン文化の最終段階に位置付けられる。

8基の甕棺墓中5基から有角状耳飾が出土している。出土した7点の黄白色ネフライト製有角状耳飾は全て鏃状の突起で楕円形の穿孔を持ち、環部には稜がある（図4：25-31）。

このうち、図4-25、26がM1a号甕棺から、図4-27、28がM1b号甕棺から出土している。日光鏡出土のM7号甕棺からは有角状耳飾は出土していない。

ライギ遺跡（Lam 2009, Reinecke 2009）（表1：15-18）

先述のクアンナム省、ホイアン市近郊の遺跡群に属する。2002年から2004年にかけて調査され、2002年には2つの発掘坑（40㎡）から甕棺墓8基と墓1基が、2003年には2つの発掘坑（60.5㎡）から甕棺墓22基と土坑墓1基が検出された。2004年には、192㎡の発掘坑から甕棺墓55基と土坑墓8基が検出された。甕棺内からはカーネリアン、瑪瑙、水晶、ガラス、ネフライト、金製などのビーズが計10000点以上出土している。さらに特筆すべきは2004年第一発掘坑M37号土坑墓と共伴して出土した後漢期に比定される青銅製容器群である。この漢系遺物の年代から、当遺跡がサーフィン文化の最終末期にあたるということが指摘されている（Reinecke 2009）。

楕円形穿孔で環部に稜を持つ黄白色ネフライト製有角状耳飾が2点（図4-32、33）、楕円形穿孔で環部に稜を持たないガラス製有角状耳飾が2点確認できた。いずれも突起は鏃状を呈する。

ゴーズア遺跡（Lam et al 2002, Lam 2009）（表1：25、26）

クアンナム省ズイスエン県、トゥーボン川流域に位置する。1999年の発掘で、16㎡から甕棺墓6基が検出された。検出された甕棺墓6基のうち5基は甕棺を入れ子状に重ねた非常に珍しい例であった。副葬品としてM5号甕棺から前漢末に比定された獣帯鏡が出土している。したがって、当遺跡はサーフィン文化の最終段階に属すると考えられる。

2点出土した黄白色ネフライト製有角状耳飾は鏃状の突起で楕円形の穿孔を持ち、環部には稜がある（図4：23、24）。2点とも99年第一発掘坑のM2号甕棺墓から出土しており共伴関係

にある。

ゴーマーヴォイ遺跡 (Reinecke et al 2003, Lam 2009) (表1 : 27-31)

クアンナム省ズイスエン県、トゥーボン川流域の砂丘上に位置する。1998, 99, 2000年の3度にわたって調査され、あわせて19基の甕棺墓と4基の土坑墓が出土している。副葬品として青銅器が29点、鉄器が23点出土しており、青銅器の出土割合が多い遺跡である。このため、当遺跡はサーフィン文化の中でも古い時期に属すると考えられている。2000年の第二発掘坑、M1号甕棺出土の木片から $2342 \pm 45\text{BP}$ 、 $550-200\text{cal BC}$ のC14年代が得られており、前述の見解と合致している。

98年発掘坑より長三角形の突起を持ち、楕円形穿孔のガラス製有角状耳飾1点(図4 : 43)、同じく長三角形の突起を持つ土製の有角状耳飾1点(図4 : 49)が出土しているが、いずれも出土状況は不明である。

99年発掘坑M3号甕棺内からは、突起が鋸状を呈し、穿孔は円形で環部に稜のない緑色ネフライト製有角状耳飾が3点(図4-1, 2, 3)出土している。このうち1点は産地同定分析によって台湾産ネフライト製であることが確認されている(Hung et al 2007)。

ソムオック遺跡 (Pham & Doan 2000) (表1 : 39, 40)

クアンガイ省、大陸から約30kmの南シナ海上にうかぶリーソン島に位置する。1996年に試掘、97年に発掘がおこなわれ、1999年にも試掘がおこなわれている。当遺跡の甕棺は、サーフィン文化の長胴形甕棺とは異なる形態であり、海洋的なサーフィン文化と考えられる。遺跡はサーフィン文化の古い段階に属するとされているが、チャンパ時代の土器や、漢の印文陶も出土しているなど、遺跡は長期間にわたって使用されていたと考えられる。

97年試掘坑3より、鋸状突起を持ち環部に稜のないガラス製有角状耳飾(図4 : 18)が1点報告されている。左の突起とフック部分が欠けているため、穿孔の形状は特定できない。また、筆者が2010年にクアンガイ省博物館で資料調査をおこなった際、鋸状突起を持ち、穿孔は円形で環部に稜のない緑色石製有角状耳飾1点を確認した。

スイチン遺跡 (Nguyen 2000) (表1 : 41)

ソムオック遺跡と同じく、クアンガイ省、大陸から約30kmの南シナ海上にうかぶリーソン島に位置する。

2000年発掘坑1のM6号甕棺より、鋸状突起を持ち穿孔は円形で稜を持つ、緑色を呈する石製の有角状耳飾が出土している。

タムミー遺跡 (Trinh va Pham 1977) (表1 : 42)

クアンナム省ヌイタイン県タムキー市に位置する。1970年代に発見・調査され、100㎡の発掘坑から甕棺墓24基が検出された。

M7号甕棺から白色石製有角状耳飾が1点出土している(図4 : 4)。鋸状の突起を持ち、

穿孔は円形で環部に稜はみられない。

タインドック、フークオン遺跡 (Permantier 1925) (表1 : 43-53)

クアンガイ省の海岸沿いに形成された南北に伸びる砂州上に立地する。一般にサーフィン遺跡と呼ばれるサーフィン文化の標識遺跡で、1909年に発見された。パルマンティエ氏による報告があるが、出土状況などの詳細な情報は報告されていない。一部の遺物は現在コラニコレクションとしてベトナム歴史博物館に収蔵されている。

筆者がベトナム歴史博物館に収蔵された資料を実見したところ、計11点の有角珓状耳飾が確認できた。鎌状の突起を持ち、穿孔は円形で環部に稜がない有角珓状耳飾が1点、同じく鎌状の突起を持ち、穿孔は楕円形で環部に稜のある有角珓状耳飾が9点(図4 : 34-42)確認でき、いずれも黄白色を呈する石製であった。また、鎌状の突起を持ち、穿孔は楕円形で環部に稜を持たないガラス製有角珓状耳飾が1点(図4 : 19)確認できた。

ドンクオム遺跡 (Pham et al 2003) (表1 : 54-57)

ビンディン省北部、ホアイニョン県に位置する。青銅器が多数出土しており、青銅剣、青銅斧、青銅矛などはドンソン文化の各種青銅器との共通性が指摘されている。2001年と2002年に試掘が行なわれ、甕棺墓8基が検出された。2003年の発掘では、第一発掘坑(60㎡)から土器集積が、第二発掘坑(20㎡)、第五発掘坑(15㎡)から甕棺墓と考えられる土器集積が4つずつ、第六発掘坑(65㎡)から甕棺墓14基が出土した。

当遺跡では、鎌状突起を持つ、穿孔円形で環部に稜のある有角珓状耳飾が3点出土しており、いずれも白色ネフライト製である(図4 : 20-22)。また、長三角形の突起を持つ土製の有角珓状耳飾が1点(図4 : 48)出土している。

これらのうち、図4 : 20、21はM20号甕棺出土で共存関係にある。

3-2. ベトナム北部、ドンソン文化期

ドンソン文化は、ベトナム北部タインホア省、マー河右岸の石灰岩質丘陵部の低地に営まれたドンソン遺跡(居住および墓地遺跡)を標識とする鉄器文化で、ベトナム中部サーフィン文化とほぼ同時期に存在したと考えられている。典型的なドンソン文化の遺跡はベトナム北部の至る所で確認されているが、特に紅河、マー川、カー川流域に集中している。鉄器時代の文化であるが銅鼓、靴形青銅斧に代表される青銅器が特徴的な文化である。銅鼓は、中国の雲南やタイ北部との密接な関係を示し、インドネシアでも確認されるなど広域に分布する遺物である。

ドンソン文化では土坑墓、舟形木棺墓、甕棺墓やバケツ形青銅容器への埋葬など多様な葬制が営まれた。ベトナム北部の前時代(フングエン、ドンダウ、ゴームン文化期)までと比べると、多様な埋葬形態の副葬品として耳飾の出土数は増大するが、多数を占めるのは珓状耳飾で、有角珓状耳飾はわずかに確認されるのみであった。しかし、近年の発掘で有角珓状耳飾が出土してお

り、今後の調査成果が期待される。

ランヴァク遺跡 (Imamura et al eds. 2004) (表1 : 1)

ゲアン省に位置する。1972年に発見され、1973年に第一次調査がおこなわれた。1980-81年に日越調査団によっておこなわれた第二次調査で墓葬142基が検出された。

数形態の土坑墓と極少数の甕棺墓からなる墓地遺跡で、ヘーガー1式銅鼓、青銅製短剣、青銅製鍬などが出土している。ドンソン文化の青銅製遺物が多く出土しているが、墓葬のバリエーションは大きく異なる遺跡である。遺跡の年代は紀元前3世紀頃から紀元前後とされる。

当遺跡からは石製有角状耳飾の出土が報告されている(横倉1987b)が確認できなかった。またゴ・シ・ホン氏によれば、「ドンホイ出土と同形式」の耳飾が出土したとされ、平野氏の論文中でもガラス製の長三角形の突起が言及されている(平野2001)。ゴ氏、平野氏の言及した遺物は、長三角形の突起を持つガラス製有角状耳飾と考えられるが、実物を確認するには至っていない。

スアンアン遺跡 (表1 : 2)

ハティン省に位置する。後述のドンホイ遺跡出土品と「同形式」(横倉1987b)とされる玉製の有角状耳飾1点の出土が報告されている。筆者がベトナム考古学院において文献調査をおこなった結果、報告書等は見つからなかったため、詳細は不明のままである。

バイコイ遺跡 (Le et al 2009) (表1 : 3-5)

ハティン省北部、ビン省との省境に流れるラム川の右岸に位置する。2008年、7つの発掘坑(164.2㎡)から土坑墓14基と甕棺墓2基が検出された。サーフィン文化の甕棺とは異なり、当遺跡の甕棺は球形で、蓋には台付き皿や台付き浅鉢が組合わさる。遺跡の年代は、出土遺物をもとに2000-1800BPと報告されている。また、報告者は当遺跡を北部ドンソン文化と中部サーフィン文化のバッファーズーンであると述べている。

長三角形の突起を持つ楕円形穿孔のガラス製有角状耳飾が2008年第三発掘坑遺物包含層より1点(図4:47)出土している。環部に稜はみられない。また、ベトナム考古学会の学会発表(2010年9月)において、円形の穿孔を持ち、環部に稜のある黒色石製有角状耳飾が2点、M3号甕棺から出土していると発表された(図版・写真は未発表)。

ドンホイ遺跡 (Ha va Trinh 1977, Nguyen 1975) (表1 : 6)

クアンビン省の海岸沿いに位置する。ドンソン文化の青銅器を持ちながら甕棺墓も営まれていた遺跡で、有角状耳飾の他にも瑪瑙製、カーネリアン製のビーズが出土するなど、石材の観点から南方(インド)との関わりが示唆される遺跡である。

研究史上で最も早く、長三角形突起を持つガラス製有角状耳飾が報告された例として知られる。この耳飾の穿孔は楕円形で、環部に稜はみられない(図4:44)。

3-3. ベトナム南部、ドンナイ川流域の甕棺墓文化

ベトナム南部はメコン川が形成した扇状地であり、大小いくつもの川が南シナ海に注ぐ。河川の河口付近は沖積土による砂州が形成され、現在ではマングローブの繁茂する地帯となっている。

スオイチョン遺跡 (Nguyen et al 1978) (表1 : 58-60)

ドンナイ省内陸部のスアンロック地区に位置する。1978, 79年に2度の調査がおこなわれ、9基の甕棺墓が出土している。

鎌状突起を持ち穿孔は円形で、環部に稜のある白色ネフライト製有角状耳飾が2点 (図4 : 13, 14)、長三角形の突起を持ち、楕円形穿孔で環部に稜のないガラス製有角状耳飾が1点 (図4 : 46) 出土している。

これらのうち、石製の2点は1978年発掘のM3号甕棺出土で共伴関係にある。

フーホア遺跡 (Fontaine 1972) (表1 : 61-66)

ドンナイ省内陸部のスアンロック地区に位置する。1971年から2度にわたる調査で46基の甕棺墓が出土している。2400±140BP、2590±290BPのC14年代測定値が報告されているが、試料は不明である。

鎌状の突起を持ち、穿孔は円形で環部に稜のある白色ネフライト製有角状耳飾が8号甕棺から2点、11号甕棺から1点 (図4 : 15)、12号甕棺から2点、S号甕棺から1点出土している。

ゾンカーヴォ遺跡 (Dang et al 1998, Nguyen 2001) (表1 : 67-69)

ホーチミン市カンゾー地区に位置する。現在はマングローブに囲まれた高さ1.5mほどの微高地となっている。1993年に発見され、試掘がおこなわれた。翌1994年には調査がおこなわれ、225㎡の発掘坑から甕棺墓339基、土坑墓10基が出土した。1997年の発掘では、甕棺墓10基が見つかった。

1994年第一発掘坑の深度1.5mから出土した炭化物から2480±50BPのC14年代が得られている。

当遺跡では、鎌状の突起を持ち、穿孔は円形で環部に稜のある石製有角状耳飾が2点出土している。これらは青白色ネフライト製 (図4 : 16) とカーネリアン製である。同じく鎌状の突起を持ち穿孔は円形で環部に稜を持たない土製の有角状耳飾も1点 (図4 : 7) 報告されている。カーネリアン製の有角状耳飾は、当遺跡以外ではタイのカオサムケーオ遺跡から発見されており、石材の観点からインドとの関係が示唆される。

ゾンフェット遺跡 (Vu et al 1995, Nguyen 2001) (表1 : 70)

カンゾー地区、ゾンカーヴォ遺跡の北西に位置し、高さ2m程の微高地に立地する。

ゾンカーヴォ遺跡と同時に発見・調査された。約52.5㎡から甕棺墓20基、土坑墓2基が出土している。2002年の調査では甕棺墓12基が出土した。

長三角形の突起を持つガラス製有角状耳飾が1点報告されている (図4 : 45)。環部に稜はみられない。フック部分が破損しているため穿孔形状は特定できない。

表1 ベトナム出土有角状耳飾集成

地域	遺跡番号	遺跡名	遺物番号	突起の形状	突起細別	穿孔の形状	環部の様	素材	分類	出土遺構	遺物備考	出所典		
北部	1	ランヴァク	1	長三角状	—	—	なし	ガラス	5b	記載なし	突起のみ出土	横倉1987b/平野2001		
	2	スアンアン	2	長三角状	—	—	なし	jadeと記載	—	記載なし	図版確認できず	横倉1987b		
	3	バイコイ	3	鎌状	B'	円形	あり	石製：黒色	2a	覆箱墓	TS3-M3-1			
			4	鎌状	B'-C	円形	あり	石製：黒色	2a	覆箱墓	TS3-M3-2			
			5	長三角状	—	楕円形	なし	ガラス：緑色	5b	包含層	08BC-H3-C3	Le 2009		
	4	ドンホイ	6	長三角状	—	—	なし	ガラス	5b	記載なし		Nguyen1975/横倉1987b		
中部	5	コンラン	7	鎌状	B-B'	円形	あり	石製：白色	2a	覆箱墓	02CR-H5-C31-M162-5	Bui et al 2008		
			8	鎌状	B'	円形	あり	石製：白色	2a	覆箱墓	02CR-H7-C81-M172-2	Bui et al 2008		
			9	鎌状	B'	円形	あり	石製：白色	2a	覆箱墓	02CR-H7-C81-M172-3	Bui et al 2008		
			10	鎌状	B'	円形	あり	石製：白色	2a	覆箱墓	02CR-H7-C81-M172-4	Bui et al 2008		
			11	鎌状	B'	円形	あり	石製：白色	2a	覆箱墓	02CR-H8-C57-M194-6	Bui et al 2008		
			12	鎌状	B'	円形	あり	ガラス：水色	2b	覆箱墓	02CR-H8-C57-M194-7、フック部分欠	Bui et al 2008		
			6	アンバン	13	鎌状	A-B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	AB-7.89-01 突起1個欠	筆者実見
					14	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	AB-7.89-01	筆者実見
			7	ライギ	15	鎌状	B	楕円形	なし	ガラス：緑色	3	覆箱墓	M38	Phuong氏写真提供
					16	鎌状	B	楕円形	なし	ガラス：緑色	3	覆箱墓	M50	Phuong氏写真提供
					17	鎌状	A-B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓		Reinecke2009
	8	ハウサーI	18	鎌状	A-B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓		Reinecke2009		
			19	鎌状	B	円形	なし	ネフライト：緑色	1a	覆箱墓	HX I CC-10-94/LC2	Reinecke2009		
			20	鎌状	B	円形	なし	ネフライト：緑色	1a	覆箱墓	HX I CC-10-94/LC2、左突起欠	Reinecke2009		
	9	ハウサーII	21	鎌状	B	円形	あり	ネフライト：濃緑色	2a	覆箱墓	HX I-1.94/KXD フック部分欠	筆者実見		
			22	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	HX11 5.94/L05、左突起破損	筆者実見		
			23	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	HX11 5.94/L05	筆者実見		
	10	ゴーズア	24	鎌状	B	円形	あり	ガラス：緑色	2b	覆箱墓	HX II-5.94/H0±20 突起2個欠	筆者実見		
			25	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	99GD-H1-M2-31、左右突起欠	Lam et al 2002、筆者写真撮影		
			26	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	99GD-H1-M2-32、右突起欠	Lam et al 2002、筆者写真撮影		
	11	ゴーマヴォイ	27	鎌状	A-B	円形	なし	ネフライト：緑色	1a	覆箱墓	99MV-H3-M3-1	Reinecke et al 2002/山形氏提供		
			28	鎌状	A	円形	なし	ネフライト：緑色	1a	覆箱墓	99MV-H3-M3-2、台湾産ネフライト	Reinecke et al 2002/山形氏提供		
			29	鎌状	A-B	円形	なし	ネフライト：緑色	1a	覆箱墓	99MV-H3-M3-3	Reinecke et al 2002/山形氏提供		
			30	長三角状	—	楕円形	なし	ガラス：緑色	5b	不明	98MV	Reinecke et al 2002/山形氏提供		
	12	ビンエン	31	長三角状	—	円形	なし	土製	5c	不明	98MV-BTDX381	Reinecke et al 2002/山形氏提供		
			32	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	98BY-H2-M1a-1	山形氏提供		
			33	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	98BY-H2-M1a-2	山形氏提供		
			34	鎌状	B-B'	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	98BY-H2-M1b-1	山形氏提供		
			35	鎌状	B-B'	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	98BY-H2-M1b-2	山形氏提供		
			36	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	97BY-H2-M4	山形氏提供		
37			鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	98BY-H2-M5-2	山形氏提供			
38			鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	98BY-H2-M6	山形氏提供			
39			鎌状	B'	—	なし	ガラス	—	覆箱墓	97X0TS3、フック部分欠	Pham 1997			
40			鎌状	B	円形	なし	ネフライト：緑	1a			筆者実見			
14	スイテン	41	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	00SCH-H1-M6-3	Nguyen 2000			
		42	鎌状	A	円形	なし	石：白色	1a	覆箱墓	TM-H1-M7	Trinh va Pham1977			
		43	鎌状	B'	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	BTLSDT3623-7	筆者実見			
		44	鎌状	B-B'	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	colani1	筆者実見			
		45	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	colani2	筆者実見			
		46	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	colani3	筆者実見			
		47	鎌状	B	楕円形	なし	ガラス：緑色	3	不明	LSb18476-86、フック部分欠	筆者実見			
		48	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	LSb18478-88、フック部分欠	筆者実見			
		49	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	LSb19631-130、左突起欠	筆者実見			
		50	鎌状	A	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	LSb19634-133、フック部分欠	筆者実見			
		51	鎌状	A	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	LSb19639-138	筆者実見			
		52	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	不明	LSb19646-145	筆者実見			
		53	鎌状	B'	円形	なし	ネフライト：黄色	1a	覆箱墓	LSb19683-32	筆者実見			
		17	ドンクオム	54	鎌状	A-B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	03DgC-H1-M20-4	Pham et al 2003	
				55	鎌状	B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	03DgC-H1-M20-5	Pham et al 2003	
56	鎌状			B	楕円形	あり	ネフライト：黄色	4	覆箱墓	03DgC-H1-M21-4、左突起欠	Pham et al 2003			
57	長三角状			—	円形	なし	土製	5c	グリッド出土	03DgC-H5-C1	Pham et al 2003			
58	長三角状			—	楕円形	なし	ガラス：緑色	5b	覆箱墓	SC78-M2	Nguyen et al 1978			
18	スオイチュオン	59	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	SC78-M3-1	Nguyen et al 1978			
		60	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	SC78-M3-2	Nguyen et al 1978			
		19	フーホア	61	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	M8 覆箱	Fontaine1972	
				62	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	M8 覆箱	Fontaine1972	
				63	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	M11 覆箱	Fontaine1972	
				64	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	M12 覆箱	Fontaine1972	
				65	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	M12 覆箱	Fontaine1972	
				66	鎌状	B'	円形	あり	ネフライト：黄色	2a	覆箱墓	M5 覆箱	Fontaine1972	
		20	ソンカーヴォ	67	鎌状	A	—	あり	カーネリアン	—	覆箱墓	H3-M95、フック部分欠	Dang et al 1998	
				68	鎌状	B-B'	円形	あり	ネフライト：青白色	2a	覆箱墓	H4-M11	Dang et al 1998	
69	鎌状			B	円形	なし	土製	1c			Dang et al 1998			
21	ソソフェット	70	長三角状	—	—	なし	ガラス	5b	包含層	2号土坑墓付近出土、フック部分欠	Dang et al 1998			

4. 有角状耳飾形態分類

4-1. 分類項目

各遺物の詳細な形態的特徴を把握するための分類項目を以下に挙げる。第一に突起の形状を、鋸状突起と長三角形突起に分類した。第二に穿孔形状を、円形と楕円形に分類した。第三に環部広面の形状から、稜なしと稜ありに分類した（図3）。さらにそれらの素材から石製をa、ガラス製をb、土製をcと分ける。

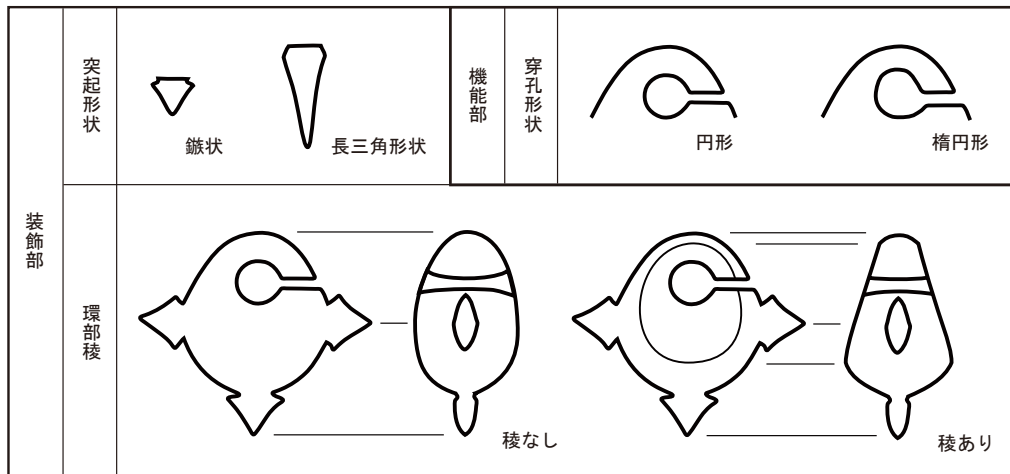


図3 有角状耳飾細別概念図

4-2. 分類

ベトナム出土有角状耳飾を4-1. 分類項目に基づいて分類した（図4）。

- 形態1：突起が鋸状を呈し、円形穿孔で環部に稜を持たない
 類型として石製の形態1a、土製の形態1cに分類
- 形態2：突起が鋸状を呈し、円形穿孔で環部に稜を持つ
 類型として石製の形態2a、ガラス製の形態2bに分類
- 形態3：突起が鋸状を呈し、楕円形穿孔で環部に稜を持たない
 ガラス製のみ存在
- 形態4：突起が鋸状を呈し、楕円形穿孔で環部に稜を持つ
 石製のみ存在
- 形態5：突起が長三角形を呈する
 類型としてガラス製の形態5b、土製の形態5cに分類

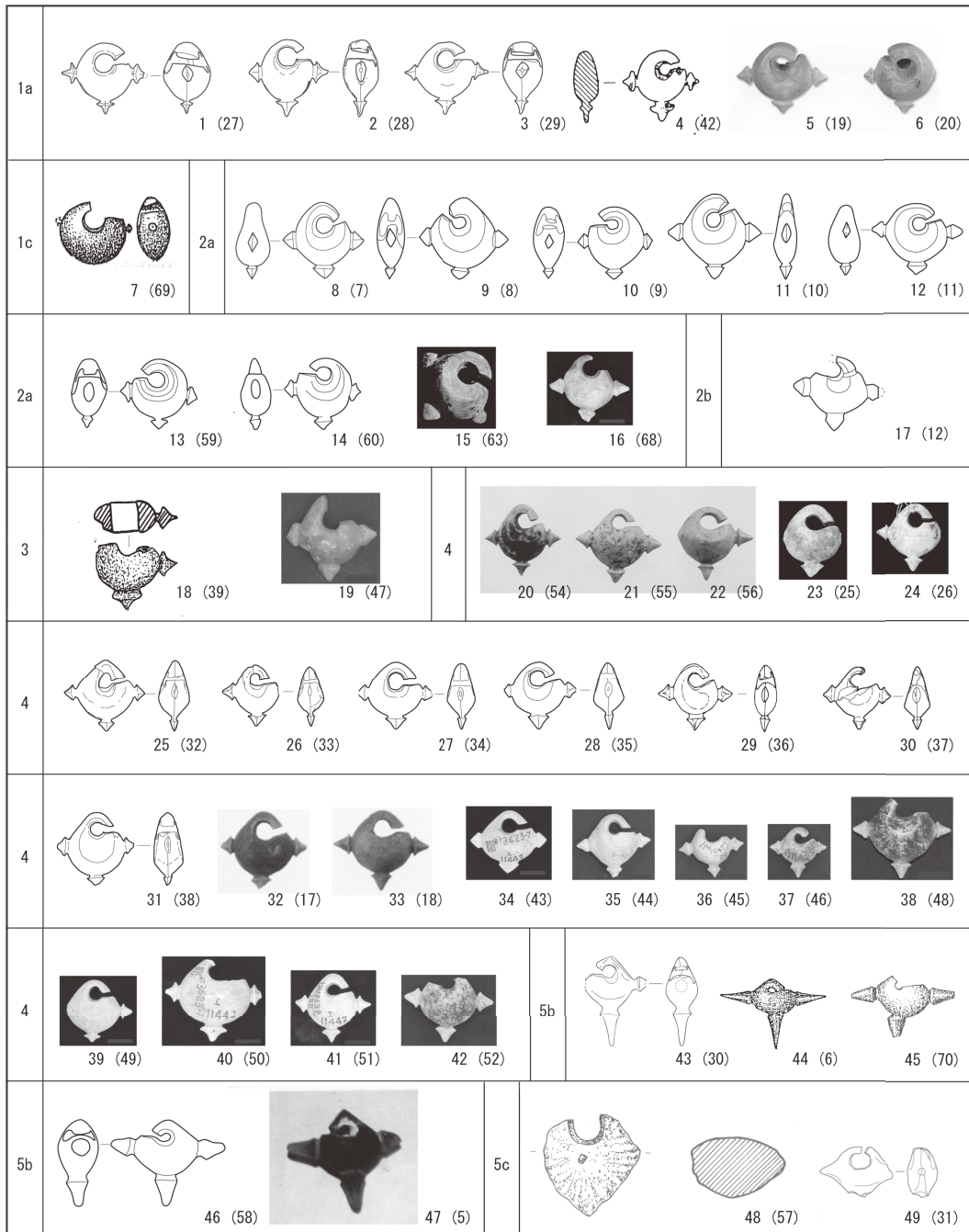


図4 ベトナム出土有角球状耳飾

() 内の数字は表1遺物番号と対応 5, 6, 15, 18, 32, 33, 44 は縮尺不明

5. 分析

5-1. 形態と製作技術

第一の分類項目として突起の形状で分類をおこなったが、鋸状を呈する突起はさら4つに分類が可能である。これらを仮に突起A、B、B'、Cとする。

突起Aは環部に接するくびれを経て最大径となり、最大径の部分から内湾し鋭く伸びて先端を作る。最大径部分には一周する稜が生じ、突起部にも上下と左右側面に稜が生じて四角錐状となる。突起はなかば三又に分かれており、先端は錐のように尖っている。突起Aはゴーマーヴォイ遺跡やタムミー遺跡出土の有角状耳飾にみられる、最も精巧に削り出された突起である。

突起Bは環部に接するくびれを経て最大径となり、最大径から先端に向けてやや内側にくびれて伸び、先端は鋭く尖らず角度がほぼ直角を呈する。突起の側面に稜をつくるBと、稜をつくらぬB'に分けられる。突起Bはビンイェン遺跡やホイアン近郊のサーフィン文化遺跡、ゾンカーヴォ遺跡出土の有角状耳飾にみられ、最も出土例の多い突起の形態である。

突起Cは環部に接するくびれを経て最大径となり、先端が半球形を呈する。突起Cは、突起A及びBと比べて加工精度は低く、A、B、B'の省略形とも考えられる。バイコイ遺跡出土の有角状耳飾の突起にのみ確認できる。

このように突起には作出精度の差が認められるが、1個体中に複数形態の突起が共存する場合がある。例えば、突起A-BやA-B'、B-B'という組み合わせは1個体中に共存する場合があるのに対し、突起CはB'のみと共存関係にあり、A、Bいずれとも共存しない。したがって、突起A、Bと突起Cの間には、突起A、B間よりも明確な作り分けの概念があったと推測できる。

第二の分類項目である穿孔を観察すると、穿孔面に条痕が認められるものと、穿孔面がよく研磨され条痕が確認できないものが存在した。条痕がみられる有角状耳飾は、いずれも管状の工具を用い、中心軸を決めて回転させ芯を削り貫く管截技術が用いられている。しかし、形態4の孔の形状はスリット付近で正円形が崩れ、楕円形を呈している。こうした孔の形状の違いは、穿孔技術ではなく、スリットをあける技術と関係していると考えられる。スリットをあける際、いずれも擦切り技術が用いられているが、擦り切りに用いる工具が異なるため製品の孔の形状が異なるのである。

形態1a、2aのスリットは両面から加工された痕跡（フック先端の断面形がV字を呈する、または、広面からみたときスリットが外に向かって開いている）から石鋸を用いたと考えることができる。一方、形態4のフック先端断面は平らであり、また広面からみたときスリットは平行である。この場合、糸切り技術を用いている可能性が高い。糸切り技術では、穿孔した孔に糸を通し、外側に引く力を応用してスリットを作出していると考えられる。このため、穿孔はスリットの周辺で外側に肥大し、結果的に楕円形を呈する。したがって、形態1a、2aと形態4では

スリット作出の技術が異なるという点を指摘できる。

第三の分類項目である環部の稜の有無は製作工程に起因している。製作の最後段階で広面を研磨する工程を加えると、稜を生ずる。稜を生じさせるために広面を研磨したのか、広面を研磨した結果として稜が生じたのかは定かでなく、この工程の目的や意味は不明であるが、この点において形態1aと形態2a、4の製作技術の違いを指摘できよう。

ガラス製品である形態2b、3b、5bのなかで気泡が認められる遺物を観察したところ、気泡に伸びがみられなかった。このことからいずれも鑄造によって製作されていると考えられる。なかには両面穿孔の痕跡が認められるものや、表面や突起を研磨したような痕跡があることから、鑄造後に加工をほどこしたと考えることができる遺物もある。

土製品では形態1cが1点、形態5が2点と出土数が少なく、製作技術を分析するにはいたらなかった。いずれも粘土を成形してから焼成していると考えられるが残存状況は良くなく、突起やフック部分が破損しているなど完形で出土している資料はない。

5-2. 形態と分布、時期

ベトナムにおける有角状耳飾の分布は中部に75%が集中しており、有角状耳飾の主要かつ中心的な地域であるといえる。次いで南部18%、北部7%の順となった。

石製品である形態1a、2a、4それぞれの分布を見ると、形態1a、4の分布は中部サーフィン文化の遺跡に集中し、形態2aの分布は、北部と南部に集中している(図5)。中部で形態2aが出土するのはコンラン遺跡であり、当遺跡が典型的なサーフィン文化の分布から外れている点に注意が必要である。

次に、各形態の年代観を確認する。先述の通り、サーフィン文化の遺跡は存続期間が短いと指摘されていることを今一度述べておきたい。形態1aは、ゴマーヴォイ遺跡とタムミー遺跡で見られ、これらの遺跡は先述したようにサーフィン文化の古い段階(紀元前500-300年頃)に属する。形態2aは、北部のバイコイ遺跡、中部のコンラン遺跡、南部のスオイチョン遺跡、フーホア遺跡、ゾンカーヴォ遺跡にみられる。これらの遺跡の年代はおおむね紀元前300年頃にあ

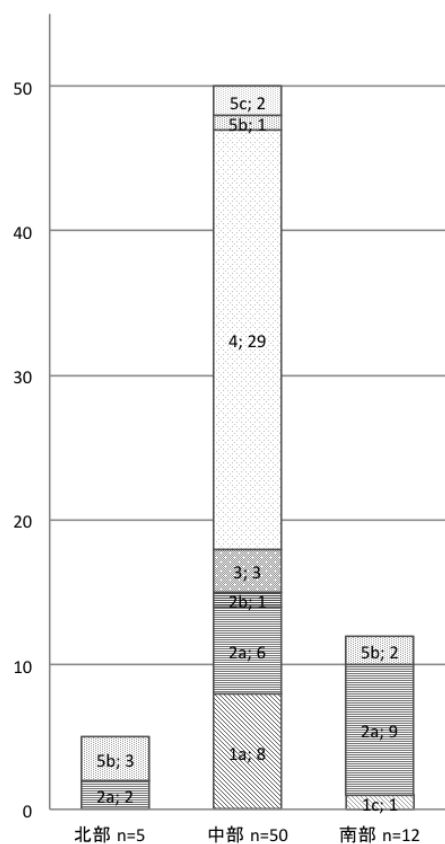


図5 形態別出土地域と数量

る。形態4は、ビンイエン遺跡、アンバン遺跡、ゴーズア遺跡、ライギ遺跡などサーフィン文化の新しい段階（紀元前200－紀元後100年頃）の遺跡にみられる特徴的な形態である。

ガラス製の形態5bは北部から南部まで分布しており、地域差を見出すことはできない。加えて、墓出土でない物がほとんどであり、いずれも年代の推定は困難であった。形態3はサーフィン文化地域のみ分布し、出土する遺跡はサーフィン文化の新しい段階である。また形態4との共伴事例から、石製有角状耳飾よりも後の出現、つまり石製品の模倣と考えられる。

形態5cは2点、形態1cは1点しか確認できず、傾向を示すことはできなかった。

6. 考察

5-1. 形態と製作技術において、石製有角状耳飾が製作技術の違いから1a、2a、4の3つの形態に分けられることを述べた。製作技術において、形態1aが最も簡素であり、次いで形態2a（稜の作出）、形態4（稜の作出と糸切りによるスリット加工）の順に工程の複雑化が想定できる。しかし、分布と遺物の年代から形態1aと形態4には中部地域（特にクアンナム省とクアンガイ省）における前後関係が想定される一方、形態2aには明確な前後関係はみられない。形態2aは北部・南部での出土例が顕著であり、中部ではサーフィン文化の北端とされるコンラン遺跡（トゥアティエンフエ省）で多く出土している。こうした出土状況から、中部地域における石製有角状耳飾の変遷の中に形態2aを位置づけることはできない。つまり石製有角状耳飾は1a→2a→4の順に変遷したのではなく、直接の新旧関係は形態1a→4にあり、形態2aは形態1a→4の流れから派生し、北部・南部においてそれぞれ製作された形態であると結論付けるに至った。

ガラス製有角状耳飾は3種あり、形態3が中部サーフィン文化の新しい段階の遺跡（ライギ遺跡など）から出土することから、石製形態1a、4のいずれかを模倣し製作された可能性が高い。形態5bと石製品形態1a、2a、4には共伴事例は確認できず、同遺跡出土であっても出土地点が異なり、関連性について明らかにすることはできなかった。

土製品は出土例が3例のみであり、かつ、それぞれ異なる形態で出土状況も異なるため、現段階では特殊な事例として認識できるのみである。

ベトナムにおける有角状耳飾の分布はサーフィン文化として定義付けられる範囲（3-1. 参照）よりも広く、北部や南部からも出土が確認された。そして、これまで「サーフィン文化の耳飾」と一様に認識されてきた有角状耳飾がいくつかの形態に分けられること、各形態ごとに分布が偏ること、特に石製品に関しては中部サーフィン文化地域において製作技術が変化していたことなどを明らかにした。しかし、北部・南部出土の有角状耳飾の形態は中部地域とは異なり、同地域における形態の変遷にも当てはまらない。つまり、北部や南部の有角状耳飾は中部地域からもたらされた、いわゆる「搬入品」ではなく、各地で製作されていた可能性が極めて高

いと考えることができる。

おわりに

有角状耳飾はこれまで、サーフィン文化地域での出土数が多いために安易に「サーフィン文化の耳飾」と見なされてきた。しかし、本論でベトナム国内における形態差、出土遺跡の年代を再検証した結果、サーフィン文化に特有の遺物であると解釈してきた現状と異なる結論が得られた。有角状耳飾を「サーフィン文化の耳飾」とするのは問題があり、遺物の「搬入」と「在地における製作」という観点からも検証をおこなう必要がある。

本論ではベトナム出土資料の集積を優先したために述べることができなかったが、ベトナム以外の環南シナ海地域でも、サーフィン文化の古い時期と同時期にあたる遺跡から同形状の有角状耳飾が出土しており、今後そういった遺物へも対象を拡大して検証する必要がある。東南アジア各国の考古学調査の現状から考えて、ベトナムにおいて有角状耳飾の出土数が多いのは充分にあり得る状況である。重要なのは有角状耳飾がいつ、どこで発生し、どのように分布域を拡大させたかを検討することである。

謝辞

資料調査をおこなう上でご助力いただきました早稲田大学非常勤講師の山形真理子先生、ベトナム考古学院の Nguyen Kim Dung 博士、ハノイ国家大学の Lam My Dung 博士、Phuong 氏、ベトナム歴史博物館の Vu Quoc Hien 氏に深く感謝致します。

引用文献

—英語文献—

- Fox, R.B. 1970 The Tabon Caves. Monograph of the National Museum. No.1, Manila.
- Hung Hsiao-Chun, Iizuka, Y., Bellwood, P., Nguyen Kim Dung, Bellina, B., Silapanth, P., Dizon, E., Santiago, R., Datan, I. and Manton, J.H. 2007 Ancient jades map 3,000 years of prehistoric exchange in Southeast Asia. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 104: 50: 19745-19750.
- Imamura Keiji and Chu Van Tan (eds.) 2004 The Lang Vac Site, Vol.1: Basic report on the Vietnam-Japan joint archaeological research in Nghia Dan District, Nghe An Province, 1990-1991. Tokyo: The University of Tokyo
- Lam Thi My Dung 2009 Sa Huynh Regional and Inter-Regional Interactions in the Thu Bon Valley, Quang Nam Province, Central Vietnam. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*, 29: pp68-75
- Nguyen Kim Dung 2001 Jewelry from late prehistoric sites recently excavated in south Vietnam. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*, 21: pp107-113
- Reinecke, A 2009 Early cultures(first millennium B.C. to second century A.D.). In Tingley, N.(eds.) *Arts of Ancient Viet Nam from river plain to open sea*. New Haven and London. Yale University Press.

Reinecke, A., Nguyen Chieu, Lam Thi My Dung 2003 *Go Ma Voi, Neue Entdeckungen Zur Sa-Huynh-Kulter.*
Köln: Linden soft.

Yamagata, M. 2006 *Inland Sa Huynh Culture along the Thu Bon River Valley in Central Vietnam.* In Bacus,
E.A. Glover, I.C. and Piggot, V.(eds.) *Uncovering Southeast Asia's Past.*: pp168-183. Singapore: NUS
Press.

—ベトナム語文献—

Bui Van Liem, Nguyen Ngoc Quy, Nguyen Dang Cuong, Tran Quy Thinh 2008 *Bao Cao Khai Quat and Chinh
Ly Di Tich Con Rang, Bao Tang Lich Su Va Cach Mang Thua Thien Hue.* Vietnam.

Dang Van Thang, Vu Quoc Hien, Nguyen Thi Hau, Ngo The Phong, Nguyen Kim Dung, Nguyen Lan
Cuong 1998 *Khao co hoc, Tien su & so su Thanh pho Ho Chi Minh.* Nha Xuat Ban tre TP. Ho Chi
Minh

Ha Van Tan, Trinh Duong 1977 *Khuyen tai hai dau tu va quan he Dong Son-Sa Huynh.* *Khao Co Hoc, 1977-4:*
pp62-67. *Vien Khao Co Hoc, Vietnam.*

Lam My Dung, Nguyen Chieu, Hoan Anh Tuan 2002 *Khai quat Go Dua Nam 1999. Ky Yeu Hoi Thao Khoa
Hoc 5 Nam Nghien Cuu Va Dao Tao Cua Bo Mon Khao Co Hoc (1995-2000).*: pp191-207. Nha Xuat Ban
Chinh Tri Quoc Gia, Vietnam.

Le Ngoc Hung, Nguyen Minh Thang, Le Van Chien 2009 *Khai quat di thic Bai Coi (Xuan Vien, Nghi Xuan, Ha
Tinh) nam 2008-2009.* *Bao Tang Lich Su Viey Nam Thong Bao Khoa Hoc.* Ha Noi

Nguyen Chi Trung, Ho Xuan Tinh 2004a *Di tich mo tang Hau Xa I. Van hoa Sa Huynh O Hoi An, Ky yeu hoi
thao khao hoc,* pp59-64

2004b *Di tich mo tang Hau Xa II. Van hoa Sa Huynh O Hoi An, Ky yeu hoi thao khao hoc,* pp76-83

Nguyen Diem 2000 *Bao cao khai quat di thi Suoi Chinh xa Ly Hai, huyen Ly Son, tinh Quang Ngai. Phu luc
ban ve, ban dap.* *Vien khao co hoc.* Ha Noi

Nguyen Manh Loi, Do Ba Nghiep, Nguyen Van Long 1978 *Khai quat di tich khao co Suoi Chon (Xuan Loc-
Dong Nai), Nhung phat hien moi khao co hoc o mien nam.* Ha Noi.

Pham Duc Minh et.al, 2003 *Bao Cao Khai Quat Dong Cuom.* *Vien Khao Co Hoc.*

Pham Thi Ninh, Doan Ngoc Khoi 2000 *Dieu tra khao co hoc khu vuc dao Ly Son (Quang Ngai), thang 1 nam
1999, Khao Co Hoc, 2000 (1):* pp76-95

Pham Thi Ninh, Pham Vu Son 2003 *Bao cao dieu tra khao sat di tich Dong Cuom (Bihn Dinh) va di thic Binh
Chau (Quang Ngai), Thu vien Vien Khao co hoc*

Tran Van An, Nguyen Chi Trung 2004 *Di thic mo tang An Bang.. Van hoa Sa Huynh O Hoi An, Ky yeu hoi
thao khao hoc.* pp84-89. Hoi An

Trinh Can va Pham Van Kinh 1977 *Khai quat khu mo chum Tam My, Khao Co Hoc. 1977-4:* pp49-57.: *Vien
Khao Co Hoc, Vietnam.*

Vu Quoc Hien, Dang Van Thang, Nguyen Kim Dung and Nguyen Thi Hau 1995 *Bao Cao Khai Quat and
Chinh Ly Di Tich Giong Phet.* *Bao Tang Lich Su.*

—フランス語文献—

Fontaine, H. 1972 *Nouveau champ de jarres dans la province de Long-Khanh.* *Bulletin de la Societe des
Etudes Indo-Chinoises, 47:* pp397-486

Nguyen Phuc Long 1975 *Les nouvelles recherches archeologiques au Vietnam (Complement au Vietnsm de*

Louis Bezacier), Arts asiatiques, numero special, vol.XXXI

Parmentier, H. 1925 Notes d'archeologie Indochinoise, Bulletin de l'Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Tome XXIV. -1924, pp325-343.

—日本語文献—

青柳洋治 1991 「ホイアン近郊のサーフィン文化—ホイアン・シンポジウムに参加して—」『東南アジア考古学会会報』11：pp77-80

今村啓爾 1987 「まとめと今後の問題点」『東南アジア考古学会会報』7：pp18-19

鹿野忠雄 1946 「東南亜細亜における有角状石輪」『東南亜細亜民族学先史学研究（上）』：pp227-234 矢島書房

平野裕子 2001 「ベトナムの古代ガラス 初期国家形成期における域内交流への一視点」『ベトナムの社会と文化』3：pp352-376

深山絵実梨 2010a 「環南シナ海地域における有角状耳飾の型式と分布」『溯航』早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編, 第28号, pp37-51

2010b 「環南シナ海地域の耳飾」『東南アジア考古学会研究報告』東南アジア考古学会編, 第8号, pp13-25

山形真理子 2006 「ベトナムの甕棺葬—その起源に関する予察—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52輯：pp97-115

横倉雅幸 1987a 「ヴェトナム出土の玦状耳飾」『東南アジア考古学会会報』7：pp9-11

1987b 「ヴェトナム出土の玦状耳飾」『物質文化』49：pp44-70